

## 東北におけるイチビの分布と被害状況

—1993年のアンケート調査から—

的 場 和 弘・田 村 良 文・橋 雅 明・伊 藤 一 幸

(東北農業試験場)

Distribution and Weed Loss of Velvetleaf

(*Abutilon theophrasti* Medic.) in Tohoku Area, Japan

—Result of questionnaires in 1993—

Kazuhiro MATOBA, Yoshifumi TAMURA, Masaaki TACHIBANA and Kazuyuki ITO

(Tohoku National Agricultural Experiment Station)

### 1 はじめに

最近、サイレーズ用トウモロコシ畑において帰化植物であるイチビ (*Abutilon theophrasti* Medic.) の発生とそれよる被害が全国的に問題となってきた<sup>1)</sup>。そこで東北地域におけるイチビを含む帰化雑草を中心とした雑草の分布と被害の現状を把握するために、アンケートによる調査を実施し、特にイチビについて検討を行ったので報告する。

### 2 調査方法

調査は東北管内の各県の農業改良普及所全所を対象に、

アンケート用紙を配布し、記入する形で行った。今回の調査の対象雑草はイチビだけでなく、帰化雑草を中心として現在問題となっているものとし、表1に示したフォーマットで行った。また雑草の同定用として写真と説明資料も添付した。

### 3 調査結果及び考察

東北管内には88の農業改良普及所(支所、駐在等を除く。1993年現在)があり、そのうち回答が得られたのは、48普及所からであった。また県ごとの回収率には大きな差はなく、いずれもほぼ5割であった。

各県における普及所単位のイチビの発生率は表2に示し

表1 調査票

雑草名	発生確認	発生地域	発生場所	作付作物	発生頻度	被害程度	侵入時期	動向	備考
	①確定 ②類似 ③不確 ④なし その他	具体的に書いて下さい。	①飼料畑 ②草地 ③水田 ④普通畑 ⑤転換畑 ⑥樹園地 ⑦野菜畑 その他	具体的に書いて下さい。	①極多 ②多 ③中 ④少 ⑤散見	①甚 ②大 ③中 ④小 ⑤無	①10年位前 ②3~5年前 ③1~2年前 ④今年から その他	①増加 ②平衡 ③減少	営農上の問題点及びその他気がつかれた点
例示 イチビ	◎	①	管内全域	①,④,⑤	トウモロコシ	②	③	②	①

表2 イチビの発生普及所率(発生/回収, %)

青森県	50
岩手県	78
宮城県	75
秋田県	83
山形県	100
福島県	75
東北	76

表3 具体的な被害

品質、嗜好性の低下	12
生育阻害、減収	8
作業能率の低下	4

た。これによると、青森県は50%と比較的低いようであるが、他県は70~80%以上と高く、山形県にいたっては100%と、回答のあった全普及所で発生が確認された。これからイチビは既に東北全域に分布していると考えられる。

イチビの飼料畑への侵入時期について図1に示した。これは侵入時期という質問ではあったが、目だちはじめた時期を記入した所も多かったものの、5年以内という回答が88%を占めていた。侵入してから目につくようになるには、数年かかるとしても、飼料畑への侵入・発生はここ10年以内に急増したものと思われる。

各普及所管内における発生頻度とその被害状況を図2、図3に示した。発生頻度が「多」以上が39%、ここに「中」を加えると60%近くとなり、発生頻度はかなり高いようである。これに対して被害程度は「大」以上が20%もあり、

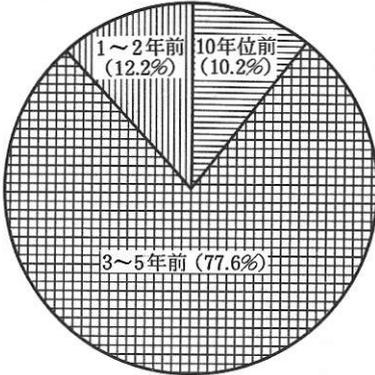


図1 侵入時期 東北

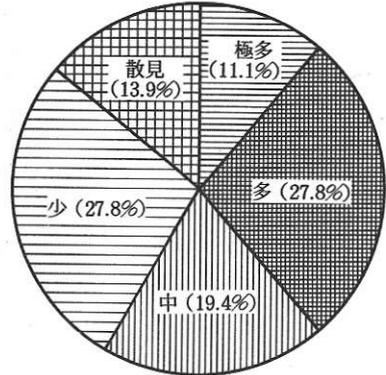


図2 発生頻度 東北

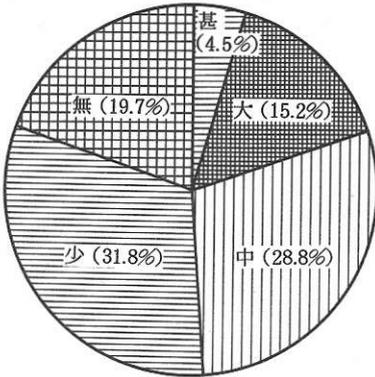


図3 被害程度 東北

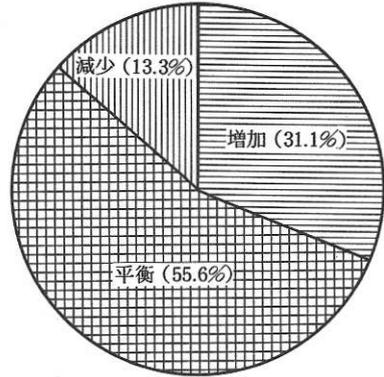


図4 動 向 東北

「少」以上の何らかの被害を受けているところが80%と被害もかなり広がっていると考えられる。侵入時期と考え合わせると、今後発生及び被害が拡大する可能性が考えられる。またその具体的な被害の種類を表3に示したが、イチビの発する強い臭いによるサイレージの品質、嗜好性の低下をあげたものが最も多く、続いて被陰等の競合によるトウモロコシの生育阻害と収量の減少、トウモロコシや機械に絡むことによる機械収穫の阻害、作業能率の低下があげられていた。

先に今後の増加の可能性をあげたが、アンケート調査による現在の発生及び被害の動向は(図4)、「増加」が31%、平衡が56%、減少が13%と減少より増加が20%以上多くなっている。また防除上の問題として、これまでの防除体系：播種時の土壌処理だけでは発生を抑えることはできず、更に春に一気に発芽するのではなく、秋まで五月雨式に発生してくるため途中の処理が難しく、防除がうまくいかないという回答が多かった。このように現場においてもその発生及び被害は拡大しつつあるといえる。

#### 4 ま と め

現在、我が国には家畜用飼料として穀物や牧草、稲ワラが世界中から大量に持ち込まれている。しかし、植物防疫

上これらに混入している“虫”はチェックされるが、雑草種子についてはフリーパスであり、実際かなりの量、種類の雑草種子が輸入飼料に混入している<sup>2)</sup>。この世界中の雑草種子が、混合された配合飼料等にまざって生きたまま農家の軒先、そして畑へと入ってゆくのである。このようにして侵入してきた雑草のうち、日本の風土に適應し、定着、繁殖できたものの一つがイチビであり、これは現在の栽培体系の中で通常行われている防除法では、抑制がむずかしいことから、今回の調査の結果のように東北地域においても既に全域に分布し、現在も拡大・増加傾向にあるのであろう。

#### 引用文献

- 1) 清水矩宏, 魚住 順, 西田智子, 原島徳一, 的場和弘, 田村良文, 橋 雅明, 伊藤一幸, 萩野耕司, 佐藤節朗, 小林良次, 館野宏司. 1994. 最近増加している草地・飼料畑の外来雑草の発生実態. 雑草研究 39 (別): 228-229.
- 2) 清水矩宏, 西田智子, 魚住 順, 原島徳一. 1994. 草地・耕地への外来雑草の侵入経路の特定と定着・拡散機構. 日草誌 40 (別): 331-332.